

2019年1月27日

## 福音書からのメッセージ

そこでイエスは、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と話し始められた。

(ルカによる福音書 4章 21節)

「イエスは霊の力に満ちてガリラヤに帰られた」。今日の箇所は、このような言葉からスタートします。ルカによる福音書には、この「霊」による働きがしばしばみられます。まずイエス様が洗礼を受けた場面では、天が開け、聖霊が鳩のように目に見える形でイエス様の上に降って来たと書かれています。さらに4章の最初にあるイエス様が誘惑を受けられる場面では、「イエスは聖霊に満ちて、ヨルダン川からお帰りになった」という記述があります。そして今日の場面と続いていくのです。

つまりイエス様は聖霊に満たされた状態で、ガリラヤへと行かれ、働かれたのです。これはイエス様は自分の力だけではなく、霊の力によって、人々の間に立たれたということを示しています。

それでは霊とは、一体何なのでしょう。霊はギリシア語でプネウマ、霊の他に風や息とも訳される語です。息といえば、神さまが最初の人アダムを造られたときに、最後に鼻から息を入れられたことを思い起こします。

わたしたちが意識して息を吐くときのことを考えてみましょう。たとえばお母さんは、小さな子どもが夢中で遊んでいたために手が氷のように冷たくなってしまったら、「はあ〜」と息を吹きかけて手を温めるでしょう。「この子の手が早く、温まりますように」、その思いで息を吐きかけるのです。

また子どもがケガをして、血がでてしまったときにも、お母さんはその患部に息を吐きかけると思います。「痛いのが飛んで



いくように」、「早く血が止まりますように」、その思いが息には込められているのです。

子どもに対する思いや愛情がおかあさんの息に込められているのだとしたら、神さまから与え

られた息には、イエス様を通してわたしたちに届けられる思い、そして神さまの愛が込められているのだと思います。

イエス様はその神さまの思いに包まれて、ナザレの会堂で語られました。その言葉は、簡単に言うところのこのようなものでした。

窮屈で、真っ暗闇で、前も見えず、縛り付けられている人たちがいる。そのような人たちはその苦しみから解放される。それもいつかそうなるだろうという約束ではなく、今、実現したのだと。

この言葉は決して2000年前だけに語られたものではありません。生きるのに疲れ、生きる意味を見い出すことができずに迷っている。イエス様はその人たちの心にも響くように、語り続けているのだと思います。そしてその背後には、わたしたちに対する神さまの愛があるのです。

神さまの息吹を感じながら、見守りの内に歩んで行きましょう。

### 桃山基督教会

〒612-8039

京都市伏見区御香宮門前町 184

TEL/Fax 075-611-2790

メール momoyama.kyoto@nssk.org

<教会ホームページ>

<http://momoyama.hannari.com/>